シリーズ

街並み景観整備について（前半）

―景観整備の考え方と実施例―

技術士（森林部門）　由田　幸雄

はじめに

景観法が平成１７年に施行されたことから多くの景観行政団体（地方公共団体）は法律に基づき景観計画を作成して良好な街並み景観の形成に取り組んでいます。このため関心のある方もいると思いますが、街並み景観整備とは何をすることなのか、よく分からないという方もいるのではないでしょうか。そこで本会誌でこれまで説明してきた森林景観整備と比較しながら、その内容を２回に分けて説明します。なお、本稿で対象としているのは店舗等が建ち並ぶ商業地区の街並みです。

１　景観整備について

最初に景観整備について説明します。この言葉は分かりにくいと思います。というのは、景観（ながめ）は物ではないので、景観整備は物でないものを整備することになるからです。それでは何を整備するのでしょうか。その前に景観について説明します。下の図は、人が山を眺めている様子を模式的に示したものです。

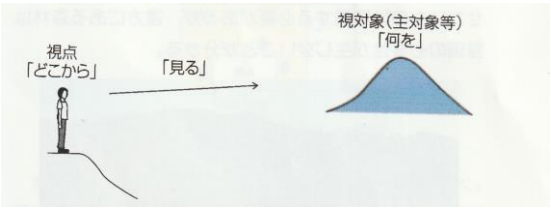

図　視点と眺める対象

この図から、山の眺めは「人」が「山」を「見る」ことによって成立していることが分かります。専門的には、景観は視点と眺める対象との関係で成立している、ということです。これは全く当たり前のことです。しかし、このことから、景観整備とは視点と眺める対象との関係を整えることだということが分かります。この関係を整える（よくする）ために行うことは次の４つになります。

ア　よい眺めとなるように視点を選定する
イ　視点から眺める対象がよく見えるようにする（見通しを確保する）
ウ　視点まわりの空間を整備する
エ　眺める対象を整備する

景観整備の内容は山地でも街でも基本的に同じですが、街では眺める場所は歩道で、眺める対象は街並み（建物）になるので、街並み景観整備と森林景観整備を比較すると以下の点で違いがあります。

「視点の選定」について

眺める対象の眺めは、視点（見る位置）によって大きく変わるので、よい眺めとするためには視点の選定が重要になります。しかし、街では歩道上の不特定多数の位置から眺めるので、この必要はありません。

「視点まわりの空間」について

山地では、視点まわりの空間は展望台とその

まわりの空間になります。一方、街では視点は歩道上にあるので、そのまわりの空間は歩道と車道になります。なお、「視点場」という専門用語がありますが、これは視点まわりの空間のことです。

「眺める対象の整備」について

山地では、眺める対象は山や森林になります。その整備については、自然度が高いので手を加えない方がよいこと、また対象が広大なので実際上整備は困難なことから基本的に眺める対象の整備は考えなくてもよいのです。山地ではあるがままの自然を眺めます。一方、街は道と沿道の建物で構成されており、眺める対象は建物になります。建物は私有物ですが、景観を重視する地区では建て替えや改修時に事業者との協議を通じて調整することができるので整備の対象となります。

２　街並み景観整備の内容

以上のことから、街並み景観整備の内容は次の３つになります。

ア　眺める対象の見通しを確保する

これは、歩道から眺める対象（建物）がよく見えるようにすることです。山地では樹木が生長し、見通しを遮るようになりますが、街ではそういうことはありません。従って、歩道に物（街路樹や電柱等）を立ち上げなければよいのです。眺める対象が見えなければ景観は成立しないので、景観整備ではこれが最優先です。

イ　視点まわりの空間を整備する

これは、視点のまわり（歩道と車道）を良好な環境にすることです。しかし、この整備は、見たいもの（街並み）の眺めには直接関係しないので何故必要なのか分かりにくいと思います。この整備が必要なのは、視点まわりの状況によって眺める対象の評価が違ってくるからです。分かりやすい例でいえば、視点のまわりにゴミが散乱し雑然としているときと清潔で整然としているときとでは同じものを眺めてもその評価が違ってくるのです。当然、視点のまわりが整備されている方が見たいものの評価は高くなります。この違いが生じるのは、視点のまわりが整備されていると、人は自分が大切にされていると思うので嬉しくなります。そういう状態で見ると見たいもの評価が引き上げられるのです。つまり、人は目で眺めを評価するだけでなく、頭（脳）でも評価しているのです。このため視点まわりの空間の整備が必要なのです。

ウ　眺める対象を整備する

これは、眺める対象（建物）を整備することによって良好な眺めにするものです。街並みは沿道の建物が連続しているのが特徴です。よって基本的な整備の考え方は建物の壁面や高さなどをそろえて連続感が生じるようにすることです。

３　景観整備の考え方

景観整備に際しては、整備の根拠となる基本的な考え方があるとやりやすくなります。景観は好みであるという人もいますが、景観はすべてが好みではなく、人間に共通する「景観の価値（評価）」があります。景観の価値は万人に共通するので、これを一つのよりどころとして景観整備を進めるのが合理的です。そこで景観整備に役立つ景観の価値について説明します。

景観の価値が人間に共通するのは、人は自分の命が最も大切である、ということに基づいているからです。自分が安全な状況にいる、あるいは安全に行動することができる、そういうことが分かる眺めは好まれるというものです。景

観の価値は多くありますが、その中から次の２つを説明します。なお、番号は便宜上つけたものです。

景観の価値１　見たいものが見えた方がよい

これは当然のことですが、なぜ見たいものが見えた方がよいのでしょうか。その前に見たいものとはなんでしょうか。それは自分のいる位置を教えてくれるものです。人は意識的、無意識的を問わず、常に自分がどこにいるのかを把握しようとしています。自分がどこにいるのか分からないというのは道に迷ったときに体験しますが、そのときは不安になります。そうならないよう、自分がどこにいるのか分かるもの（ランドマークや目印など）を見て自分のいる位置を確認したいのです。よって、山地で見たいものとは、名のある山や湖、人工物（大橋、道路等）、市街地などです。

このことを写真で説明します。

写真１の２枚は、奥日光にある中禅寺湖展望台からの見通しの状況を、その整備前後に撮ったものです。

写真１　整備前後の見通しの状況

（上）の写真では、展望台のすぐ前にある樹木しか見えません。（下）は、その樹木を取り除いた後に撮ったものです。正面に男体山がすっきりと見えており、よい眺めになりました。この２つを比較すると（下）の見たいもの（男体山）が見える眺めの方がよいと誰でも思います。見たいものが見えた方がよいのです。

街で見たいものは街並み（建物）です。よって、街並み景観整備では歩道から街並みがよく見えるようにすることが大切です。そのためには、歩道に見通しを阻害する街路樹や電柱等を立ち上げないことです。

景観の価値２　まわりが見通せて、その状況が分かる方がよい

これは安全に行動するために必要なことです。山地では歩道のすぐ近くが崖ということがあります。そのときは崖のあることが分かると、より安全に行動することができます。自分のまわりの状況が分かる方がよいのです。次に写真でこのことを説明します。

写真２と**３**は、日本庭園の通路からの眺めです。**写真２**では、通路の両側にササが繁茂しているので通路のまわりがどうなっているのか分かりません。

写真２　通路のまわりが見通せない

一方、**写真３**では、通路のまわりが芝生地なので見通しがよく、まわりが平坦なことが分かり

ます。まわりの見通しがよいので眺めを楽しみながらゆっくり歩くことができます。まわりの状況が分かる眺めの方がよいのです。

写真３　通路のまわりの状況が分かる

もう一つ別な事例を説明します。

写真４の２枚は、公園の池のほとりから同じ方向を撮ったものです。

写真４ 池のほとりからの眺め

(左)水際が分からない　　(右)水際が見える

（左）の写真では、前方に草が茂っているので、水際がどこからなのか分かりません。**（右）**は、草がないので、水際が見え、地面が堅固なことも分かります。（左）でも水際がどこからなのかおおよそ分かりますが、推定でなく目で見て分かる方がよいのです。

以上の事例から自分のまわりの状況が分かる眺めの方がよいことが分かります。

なお、まわりの状況が分かるというのは、突き詰めると地面が見え、その凹凸や段差の有無等が分かるということです。

以上のことから街でも、視点のある歩道のまわりがよく見えるようにする必要があります。そのためには植栽などの物を立ち上げないことです。

次に街並み景観整備の内容について、それぞれ詳しく説明します。

４　見通しの確保

見通しの確保の考え方は、見たいものとそのまわりが他のもの（見たいものでないもの）によって邪魔されずにすっきりと見えるようにすることです。

最初に、見通しが阻害されているとはどのような状態なのかを説明します。

（１）見通しの阻害について

ア　見たいものの見通しの阻害

写真１は街路から東京スカイツリーを撮ったものです。見たいもの（東京スカイツリー）に電線が重なっており、見通しが阻害されているのが分かります。

写真では分かりにくいのですが電線は道を横切って奥の方まで張り巡らされているので、邪魔だなぁと思います。電線自体は細いのですが、それらがまとまって見えるのでうるさく感じられるのです。

写真１　電線による見通しの阻害

写真２は東京タワーの眺めです。（左）は歩道から撮ったものですが、街路樹が東京タワーの見通しを邪魔しています。（右）は横断歩道から撮ったものです。車道には物が立ち上がらないので、東京タワーはすっきりと見えています。どちらがよいかは見れば分かります。なお、（右）の眺めの方がよいと思うのは、見通しがよいので見た瞬間に東京タワーだと分かるからです。見ているものが何であるのか、すぐ分かる方がよいのです。

写真２　東京タワーの眺め

（左）歩道から　　（右）横断歩道から

以上の２つの事例から見たいものの見通しが他のもの（電線、街路樹）によって阻害されていない方がよいことが分かります。

イ　見たいもののまわりの見通しの阻害

これは見たいものの見通しは阻害されていないが、そのまわりが阻害されている事例です。

写真３の２枚は異なる時期にお台場海浜公園にある展望デッキからレインボーブリッジを撮ったものです。この展望デッキは観光名所で外国人観光客も含め多くの方が訪れています。（上）の写真ではレインボーブリッジが見えていますが、その手前に街路樹の枝葉が見えているので、何か雑然とした、すっきりしない眺めになっています。（下）は街路樹が取り除かれた後に撮ったものです。レインボーブリッジの手前に水面（海）が見え、すっきりとした眺めになっています。この２枚を比較すると、（上）は街路樹によってレインボーブリッジのまわりの見通しが阻害されていることが分かります。

写真３　レインボーブリッジの眺め（台場）

以上の事例から街並み景観整備では、見たいもの（街並み）だけでなく、そのまわりの空間もよく見えるようにする必要があります。

（２）街路樹による見通しの阻害について

街は道と沿道の建物とで構成されており、歩道から見たいものは街並み（建物）です。街並みが見えるようにするためには歩道に物を立ち上げなければよいのです。しかし、歩道に街路樹があるために街並みが見えなくなっている事例が少なくありません。このことを写真で説明します。

写真４は銀座のマロニエ通りの歩道から撮ったものです。車道は見えますが、街並みは街路樹によって見通しが遮られているので見えませ

ん。また、歩道空間は街路樹と壁に挟まれているので、閉塞感のある眺めになっています。

写真４　歩道からの眺め（銀座マロニエ通り）

写真５は昭和通りの歩道から撮ったものです。ここは街路樹に加えて低木の植栽があるので、車道も見えません。このため街路は歩道空間と車道空間とに分かれてしまい、歩車道の一体感が生じません。なお、歩道の左側には建物が連続していますが、視線と建物とのなす角度が小さいので見てもよく分かりません。

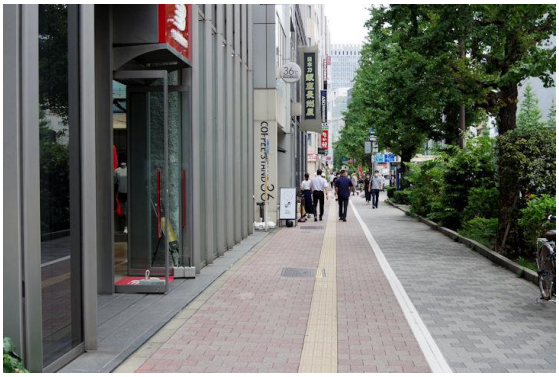

写真５　歩道からの眺め（銀座昭和通り）

次に街路樹の有る無しによって見通しがどう違うのかを説明します。

（３）街路樹の有無による見通しの違い

写真６と**７**は、三越や松屋デパートのある銀座通りの歩道から撮ったものです。

写真６では街路樹があるので右側の街並み（建物）は、ほとんど見えません。**写真７**は街路樹の間隔が空いていたところから撮ったものです。歩道（幅６m）の右手前には街路樹がないので、右斜め前に松屋デパートが見えています。また歩道と車道の境に物がないので歩車道の一体感が生じており、開放感のある眺めになっています。見たいものが見えるこの眺めの方がよいと誰でも思います。

写真６　歩道に街路樹のある場所からの眺め

写真７　街路樹の少ない場所からの眺め

銀座には街路樹のある通りとない通りが混在しています。それらの通りの見通しがどう違うかを説明します。

写真８は並木通りを撮ったものです。

写真８街路樹のある通りの見通し（並木通り）

街並みは道の両側にある街路樹によって見えません。

写真９は西５番街通りを撮ったものです。街路樹がないので見通しがよく、街並みとそのまわりの空間がよく見えています。

写真９　街路樹のない通りの見通し（西５番街通り）

銀座の通りは格子状に配置されているので、街路樹がないと遠方まで見通すことができます。この通りの奥に見えるビルは約５百メートル先にあります。なお、この通りは街並みの見通しがよいだけでなく、歩道と車道がよく整備されています。中央のやや色の濃い部分が車道ですが歩道と同じ材料で舗装されており立派です。ただ、少し惜しいのは歩車道を区分する白線が目立ちすぎることです。。もう少し弱い方がよいです。

以上の事例から街並み景観を重視する地区では、街並みが見えるよう、歩道に物（街路樹や電柱等）を立ち上げないことです。

（３）街路樹でよい眺めをつくる

街路樹があると街並みの見通しが阻害されることを説明しましたが、街路樹でよい眺めをつくることもできます。それはヴィスタ景観です。ヴィスタとは、枠がまえされた見通しの眺めのことです。樹木で見せたいものの両側を囲んで枠をつくり、それを連続させることによって見せたいものを際立たせることができます。有名なのは**写真 10** の明治神宮外苑にある、いちょう並木と絵画館です。いちょう並木の奥に見せたいもの（絵画館）が見えています。この景観では見せたいものだけが見えればよいので街路樹による見通しの阻害は生じません。

写真 10　いちょう並木と絵画館

もう一つ別な事例を紹介します。**写真 11** は東京駅の西側（丸の内）にある行幸通りから駅を撮ったものです。正面奥に見える東京駅は街路樹（イチョウ）によって枠がまえされています。この通りの幅は 18m もある大変立派なもので、歩行者専用の道です。東京駅から皇居に向かってまっすぐに伸びています。撮影位置から東京駅までは約５百メートルあります。正面に東京駅を見ながら広い道を歩くのは大変気持ちのよいものです。歩道上には街路灯以外に立ち上がっているものはないので整然とした眺めになっています。このようなヴィスタ景観をつくる場合、街路樹は大変効果的です。

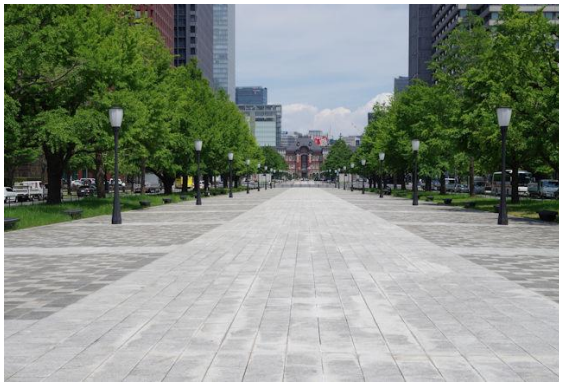

写真 12　広い歩道から東京駅を望む

説明したことをまとめると以下のとおりです。

1　景観は視点と眺める対象との関係で成立している。

2　よって景観整備とは、この両者の関係を整える（よくする）ことである。

3　街並み景観整備で関係を整えるために必要なことは、次の3つである。

ア 歩道から街並みが見えるようにする

イ 視点のまわり（歩道と車道）を整備する

ウ　街並み（建物）を整備する

4　景観整備において最も優先させることは、見たいものが見えるようにすることである。そのためには歩道に物（街路樹や電柱等）を立ち上げないことである。

本稿では景観整備で重要な見通しの確保について説明しました。歩道から街並みが見えるようにするためには歩道に物（街路樹等）を立ち上げないことです。街路樹があると見通しが遮られるだけでなく、街路空間が歩道空間と道路空間に分かれてしまい広い空間を享受できなくなります。しかし、現状は街路樹によって街並みの見通しが阻害されている事例が多くみられます。この原因は景観整備とは何を行うことなのかが十分に理解されていないからではないでしょうか。展望台の前方に街路樹を植える、あるいは歩道に街路樹を植えるというのは、その表れだと思います。

次回の後半では、視点まわりの空間の整備、眺める対象の整備、良好な街並み景観について説明します。

なお、景観は見ることが重要ですが、写真はカラーでないと見てもよく分かりません。森林部門技術士会のホームページのお知らせには、本稿のカラー版が掲載されていますので、是非そちらをご覧になってください。

参考文献

1 由田幸雄：森林景観づくり、日本林業調査会、2017

2 堀　繁：庄内景観講座（講演集）、山形県庄内総合支庁景観形成検討会議、2005

3 篠原 修（編）：景観用語事典、彰国社、2021